勿凝学問 210

国民が喜ぶけど国民を不幸にしない方法としての「政治家の世襲禁止令」
税制抜本改革の「中期プログラム」合意と中谷巌氏の文章に思う

2008 年 12 月 23 日
慶應義塾大学　商学部
教授　権丈善一

2008 年 12 月 23 日未明、税制抜本改革の「中期プログラム」を自民公明両党の間で合意したらしい。まぁ、「消費税を含む税制抜本改革を 2011 年度より実施できるよう、必要な法制上の措置をあらかじめ講じ、2010 年代半ばまでに段階的に行って、持続可能な財政構造を確立する」という言葉は、一応、生き残ったとのこと――さぁその前に買い物をしておこうとみんなが思って、世の中結構良い方向に向かったりして――3 年先じゃ無理か（笑）？

ところで、消費税を含む税制抜本改革を行うことを公約する政党が選挙で勝つためには、国民に負担増を求めることで失う支持を相殺できるほどの、国民が喜ぶ何かをやらなければならないことは確かである。もちろん、長い目で見れば国民が不幸にならないような何かであったほうが望ましい。そうなれば、官僚叩きでもないし、ましていわんや東大の民営化でもない――はたしてそれは何か？という問題意識が、わたくしの中には長い間あった。

先週、ある知人から「おもしろ記事をみつけました」といって、メールが送られてきた。それは、中谷巌氏の「小泉改革の大罪と日本の不幸」『週刊現代』であった。３つある見出しの中で最初の見出しは「豊かな中産階級はどこへ消えた」、次が「政治家の世襲を禁止せよ」であり、最後が「国民負担率 75%でも幸せな国」であった。ふたつめの「政治家の世襲を禁止せよ」は他のふたつと比べてかなり異質であったので、ここにわたくしの関心は集中した。

なるほどぉ、中谷氏のような構造改革派からの転向者（転向という言葉は中谷氏本人が用いている）が、「政治家の世襲を禁止せよ」と唱えられるわけだなと感心する。

そして今朝 23 日に、Amazon に頼んでいた中谷氏の『資本主義はなぜ自壊したか』が届く。さっそく、「政治家の世襲を禁止せよ」の箇所を探すも見あたらない。この本を出版した後、『週刊現代』の文章を書く際に新たに書き加えられた（中谷氏の表現を借りれば）「日

本再生への提言」なのだろう。しかしながら、この「政治家の世襲を禁止せよ」は、なかなか良い。国民が大いに喜ぶけど、それでいて国民を決して不幸にしない妙案である。そしてこういうことを、中谷氏のような人が主張するということが大切なのである。

「中期プログラム」に（政治家としては失言とも受け止められかねない？）「消費税を含む税制抜本改革を 2011 年度より実施」を残した麻生総理には、これ以上ないほどの多難な前途が待っている。ということで、最後の最後の切り札として、「同一選挙区からの政治家の世襲禁止令」でも出されたらいかがですか。ここで「同一選挙区からの」は、わたくしが勝手に付け加えたんですけどね。

「消費税を含む税制の抜本改革と政治家の世襲禁止令の刺し違え戦略」を突きつけられたら、世論調査で麻生さんを「支持しない」と答えていた人たちも、かなり迷うと思いますよ。僕なら「同一選挙区からの国会議員の世襲禁止令」が公布された日本を、消費税うん％で買うことができるのならば、安い買い物のように思えるんだけどねぇ。それに、この世襲禁止令は、小泉構造改革を継承する！と、今や「何いってんの？」と思われるようなことを相も変わらず言っている人たちが、なかなか出せない公約でもある――その理由は分かるでしょう。

「勿凝学問 73　華麗なる一族によるこの国の改革」の中で「この国で最も改革が必要な世界は、「政界」ではないのかと思い始めて久しい」などと書き続けてきたわたくしから見ても、中谷氏の「政治家の世襲を禁止せよ」は、本当に良いアイデアだと思う。

ちなみに、2005 年 9.11 選挙前の半年ほど、自民党は、追い上げる民主党への対抗策として、開かれた自民党のイメージを演出するために公募を増やしていこうという動きがあった。だが、この動きも 9.11 選挙の自民党圧勝で消えていった。そして民主党も、「勿凝学問 9　あの話はどこに行ったのか？――民主党の世襲禁止令」で触れているように、岡田代表の頃に三親等内の世襲禁止令を検討していた。政党間競争が激しくなる極のステージになれば、政治家が最も手放したくない権益を手放さざるを得なくなるかもしれない。そしてそのステージが、実は目の前に来ているのかもしれないのである。

「勿凝学問 210　基礎年金租税方式についての国民的議論はすでに終わっているよ――ただし、普通の読解力をもっていないと理解できない話ではある」4 頁 （以下、社会保障国民会議第 4 回雇用年金分科会での発言内容）
私の文章に「政策論は価値判断と実行可能性という制約条件下で織りなされるアートである」というような文章があるのですが、私はこの実行可能性をどういうふうに考えていけばいいのかと問うたりするわけです。 実は、為政者に強い権力さえあれば政策なんてものは何でも実行できるんですね。要す

るに、為政者というのは権力の強さの度合いに応じて政策の自由度が高まっていくわけで、その権力者の力を抑制するものは一体何なのか、などと考えたりするわけです。
　私が昔から考えている中での一つの概念として、為政者の保身というものがやはりあると思っています。為政者の保身、自分を守るために、為政者のポジションであることを守るために、結構、為政者というのはいろいろと妥協をしていったり、やりたいことを抑えて、結果、被統治者にとって望ましい善政を行ったりするわけです。

　思いっきり趣味の話をしておけば、1290 年代にスコットランドがイングランドのエドワード 1 世に反旗を翻した。そこでイングランドのエドワード 1 世は 1925 年にスコットランド戦の戦費調達のために、貴族以外に騎士と市民（ブルジョワ）に協力を求める会議を開いた。これが後に模範会議と呼ばれるようになり、今の The House of Commons 庶民院の源となる。ちなみに、こうした動きの中、1297 年に、ウィリアム・ウォレスが歴史に登場することになる。
　麻生総理のポジションは危ないと思う。しかし、彼が適度に臆病になって保身を考え、われわれ被統治者にとって望ましい善政を行うことを期待することもできるのである。万が一そういうことでも起こるとすれば、やっぱり世の中、そう捨てたものじゃないと言えるんだけどね。

　最後に、中谷氏の論功についての感想を。
　今の日本に対して良い方向に大きなインパクトを与える本だと思うし、（年金や税のあたりなどには目をつぶって）学生に薦めたい内容の本でもある。そして‥‥‥次の文章のなかの、勿凝学問 1 となった「思想と酩酊体質」をご参照を。この文章を書いてから 7 年、根っ子の部分で人というのはなかなか変わらない――僕も、そして中谷氏も。

年金改革と積極的社会保障政策――再分配政策の政治経済学Ⅱ』の「はじめに」より

本書をまとめるにあたり、『勿凝学問』〔学問に凝る勿れ〕というコーナーを設け、そこには、最近書いた随筆やインタビュー記事をおいた。「学問に凝る勿れ」とは、1890 年に慶應義塾に大学部が設置された開設式における福澤先生の演題である。慶應義塾大学を開校するという記念すべきまさにその日に、第一期の入学生を前にして次のように話す福澤先生の痛快さは堪らない。

> 「之（学問）を好むと同時に学問に重きを置かず、唯人生の一芸として視るのみ。学を学んで人事を知らざるは碁客、詩人の流に異ならず。技芸の人に相違なしと雖も人生の完全なるものに非ずとて、物に触れ事に当たりて常に極言せざるはなし。〔中略〕学問に重きを置くべからざるとは、之を無益なりと云うに非ず、否、人生の必要、大切至極の事なれど、之を唯一無二の人事と思い、

他を顧みずして一に凝り固まる勿れの微意のみ」

『福澤諭吉著作集』第五巻所収

わたくしの雑文や雑談をひとつにくくる呼称を求めて案じているとき、ふと『勿凝学問』がひらめいた。それがこの企画の由来である。この「はじめに」につづく次のページは、『勿凝学問』という新企画に収めた「思想と酩酊体質」からはじまる。二年以上も前に書いたこの随筆には、いま読み返してみると社会保障研究というわたくしの仕事に対する基本的な姿勢が記されているように思える。

でっ、これは「法則」と言って良いようなものだけど、酩酊体質じゃないと派手な人生を歩めないわけで、だから、酩酊体質じゃないと有名人にはなれないんだよなぁ。だって有名人ってのは、ミュルダールをはじめみんな転向者なんだよね。。。はじめから新古典派の経済学はおかしいゾなどと思っていたんじゃだめなんだ。

院生くらいによく言うことは、「研究テーマってのはねぇ――自転車の車輪を転がしたら蛇行しながら転がっていくだろう。車輪の後ろを犬のように追いかけていたんじゃダメなんだよなぁ。車輪の軌道を読んで直線的に歩いていけば、車輪が転がってくるのを待つことができる。僕ら凡人がこの世界で生きて行くには、それくらいの工夫をしても損はない」。「法則」に従えば、この指導では有名人は育たんのだが――まっ、いっか。

参考資料

勿凝学問 9　あの話はどこに行ったのか？――民主党の世襲禁止令

勿凝学問 73　華麗なる一族によるこの国の改革

勿凝学問 92　幻の書評――権丈善一『医療政策は選挙で変える』読後感